

豪州 知られざる強制収容

日本人ら4千人拘束

太平洋戦争開戦に伴いオーストラリアで強制収容された4千人を超える日本人や日系人——。過酷な環境などで約200人が亡くなった。そんな知られざる歴史を伝えようと、同国で6日から記念行事が開かれ、日本からは当時、収容されていた人たちも参加する。

6日から、現地で記念行事

1941年12月8日の開戦により、豪州国内で1141人、近隣の仏領ニューカレドニアやオランダ領東インド諸島（現インドネシア）などから3160人の日本人や日系人が、強制収容所へ送られた。計4301人は同国南東部のタツラ、ハイ、



⑤タツラ収容所の日系人ら。逃亡しても目立つよう、支給された服は赤く染められていた。1943年6月、豪州・ピクトリア州、豪州戦争記念館（AWM）所蔵052460。戦後、ニューカレドニアを訪れた時の写真を見る渡辺ミヨ子さん。千葉市花見川区

ラプデーの三つの収容所へ入れられ、少なくともタツラで46人、ハイで39人、ラプデーで15人が死亡した。開戦時ダーウィンに住んでいた横浜市港北区の村上喜三郎さん（86）は約5年間、タツラ収容所にいた。砂漠が多い内陸気候で、真夏の気温は40度を超え、冬は霜柱が立った。冷暖房はなく、冬場は少しでも火の気がある食堂に集まった。収容者の代表を務めていた父安吉さん（当時63）は43年、風邪をこじらせて肺炎で死亡。遺体はトラックで墓地へ運ばれ、家族だけが付き添い埋葬した。

戦後になっても豪州では反日感情が強く、日系人であることは隠した。中学・高校の時期に収容されていたため、学校へ通えず、戦後は工場などで働きながら独学で高卒の資格を得た。62年に帰国し、プラント会社に就職した。「自分たちの体験を

伝えるため、催しが開かれることは喜ばしい」と語る。式典にはめいが代理出席する。

千葉市花見川区の渡辺ミヨ子さん（79）は、ニューカレドニアからタツラ収容所へ入れられた。収容所内で三つ年下のめいミサオさんを亡くした。暖を取ろうとして熱湯で大やけどを負い、敗血症になった。

ミヨ子さんは「なぜあんな体験をしなければならなかったのか、ずっと問い続けてきました」と語る。現地では、夫の正さん（78）と一緒に、ミサオさんの墓前に花とお菓子を供える。

催しは6、9日、シドニーの西約250kmにあるカウラで開かれる。市と日豪交流史の研究者の共催。最終日は、戦時中に死亡した日系の民間人や日本軍捕虜ら522人の遺骨が集められた「日本人戦争墓地」で慰霊祭があり、墓地に眠る約半数が民間人であることを記した銘板が設置される。墓地にはこれまで44年8月に日本軍捕虜の集団脱走事件で234人の死者が出たことを示す銘板しかなかった。

日系移民の研究を続けるクインズランド大学の永田由利子教授は「民間の日系人の抑留をめぐる公的行事は、戦後の豪州ではほとんど初めて。風化させまいという思いから企画された」と語る。（編集委員・永井靖二）



太平洋戦争と豪州

日本軍による豪州本土への攻撃は42年2月に始まり、同月19日に250人以上の死者が出るなど、拠点ダーウィン港への空襲は60回以上に及んだ。

豪兵は約2万2千人が日本軍の捕虜となり、泰緬鉄道建設に駆り出された1万3千人のうち2600人が死亡するなど死者は計7700人に達した。